

アーティストインタビュー

松崎太郎さん

—まず最初に、太郎さんがお芝居を始めたきっかけに向けて、生い立ちから、今の学校生活があって十月劇場があってっていうようなところ、お芝居に関わるようになったきっかけとかについて、ちょっと歴史的なところをお話いただければと。

松崎：地元の仙台南高校出身なんですけど。2年3年の時の担任の先生がお芝居好きで、で、かわいがってもらったんです。その当時は、お芝居僕やってないし。事あるごとにお芝居の話するもので、ちょっと興味持ってた。大学入った時に、じゃあ、それまでハンドボールやっていたんですけど、歯はぼろぼろになるし、運動はできないと。そうした場合に、うちの親父が絵描いてたから、美術部か、先生が言っていた演劇部どっちかにしようかなと思って。で、オリエンテーションって、学校の最初にみんな集められて、学校の説明受けるんですけど、たまたま隣に座ったやつが演劇部に行くっていうやつだった。あ、じゃあ俺も演劇部に顔出すわ。で、それで演劇部に顔を出したんですね。で、きっかけはそんなもんなんですけど。たまたま部室行ったら同級生の最初にちょっと入ってた女の子がいて、かわいかった（笑）。で、「入るんでしょ？」って言われて、その場で「入ります」と（笑）。ですから、動機はすごく不純な動機で、決断も不純でですね。それで、東北学院大学の演劇部に入った次第ですね。

その時に、新入生だけ、12、13人いたんです。その年多くて。で、最初に集められた日に会ったのが、渡部ギユウと、今の自分の奥さんである。だから、同じ日にすげえ出会いが。今でも覚えているんですけど。それが最初ですね。

—じゃあ、大学の演劇部は4年間活動されていた？ その時のお話とかなんかありますか。どういう活動。

松崎：はい。大学の4年間は、演劇が春と秋に1回ずつ公演やるんですけど、ほぼほぼ練習しないでですね。ソフトボール大会になったんです。ソフトボールの練習か、夜、酒飲み飲みに行って、ほぼほぼ授業は出ずで。演劇の思い出は、ほぼほぼないですね。ただ、大学の2年か3年の時に、その当時の、次につな

がっていくんですけど、十月劇場が国分町にアトリエっていうか稽古場っていうか、公演地を設けて、そこのこけら公演。それを観に行ったのが十月劇場の初めての会だったんですね。あとは白鳥ビル、I.Qさん、今でもやっていますが、I.Q150、あと竹内銃一郎さんなんか東京から来て公演やってたのを観て、それまで劇団麦さんとかそういった、なんて言うんでしょうかね、新劇系のやつを観てたんですけど、大いにショック受けちゃって、こういう芝居もあるんだと思って。その時に、俺どっちかって言うと、こっちのほうが好きだなっていうのが、大学の2、3年の時、思いましたね。大学の演劇部は、それはそれで、すごい友達なんかも恵まれて、楽しい大学生活を送らしてはもらいましたけど。

—ギユウさんとあと奥さんと、公演はされてたんですか？

松崎：ギユウは、大学の1年で演劇部辞めて、そのあと東京の劇団を受けたんですけど、それが落ちちゃって。落ちたから十月に行ったわけじゃないんですけど、大学の2年ぐらいから、たしか十月劇場入って。うちのかみさんは、大学4年間。で、卒業後にやっぱり同じように十月劇場、何年かやったんですよ。ですから、僕はちょっとギユウよりは遅れて、大学卒業後に十月劇場に入団という次第です。

—さっきおっしゃっていたショックを受けたというのは、どういう意味でショックを受けたんですか？

松崎：そうですね。例えば、井上ひさしさんの芝居観てて、そこに急に唐十郎が来たっていう感じ。だから、今まで見知りしていなかったのが、急に突然目の前に現れたっていう感じ。

—十月劇場が？

松崎：十月劇場ですね。ああ、これも演劇なんだ。そんな感じで捉えた。ショックだったっていう。あと面白かった。純粹に。よく言われるのは、なんか分からないけど、楽しかったっていう。それに近いかな。

—大学2年で初めて十月劇場観て。2年ですか？

松崎：1年から始めて、2、3年の時に、たしか十月劇場を観たんですね。

—で、卒業するまで、じゃあ、それを観続けたっていう感じ？

松崎：それを、観続けるほど強烈に観続けたわけではないんです。間、やはり見逃している作品なんかもあって。大学4年の時に、十月劇場が初めてほかの劇団からテントを借りて、『水都幻想』っていう公演やるんですけど、そこでエキストラがどうしても2人は欲しいっていう話になったらしくて。で、そこで僕はその渡部から太郎さんどう？と。セリフはないんだけどね。面白そうだから、俺も前から観てるしねっていうので、僕はエキストラから入っています。もう1人のエキストラが、ちょっと今、舞台から離れているけど砂拉三駄の2人でエキストラをやったテント芝居ですね。そこからが十月劇場の始まりで。でも、そのまま、なし崩し的っていうわけじゃないですけど、大学卒業したら十月劇場に入団してたということですね。

—なるほど。十月劇場の活動のお話にさせていただきたいんですけども。例えば裕人さんについてとかも含めてお話いただけたらなど。

松崎：十月劇場を一言で言うのはなかなか難しい、作品、っていうか集団でもあるんですけど。なんでみんなが、他県からも来たんですね。盛岡だ、例えばいろいろなテントやった先で観てくれた人が、わざわざ仙台まで来て、仙台で一緒に劇団でやる。その魅力って何だろうかなと思った時に、やっぱり石川をはじめ、その人たちが面白かったですよね。強烈だし。こんな奴らいるんだ。こんな奴らと一緒にいたいっていうやつですね。芝居をしたいというよりは、こんな奴らと一緒に暮らしていけたら面白いだろうっていう。あと石川の作品が、僕としてはすごく、物語る力っていうのを信じたかったし、信じてたし。この作品をやりたい。ですから、当時としては、親戚かなんかに、「芝居やりたいんだったら、東京行ったほういいんじゃない？」って言われたんですけど、よくよくそこで考えて、答えしたら、芝居をやりたい、で、何がやりたい。俺は石川の作品がやりたい。つまり十月劇場でやりたい。それは、たまたま仙台にあっただけで、地元にあっただけで、だから東京にもしいいのがあれば東京に行くし、ただ僕の場合

は、石川の作品がやりたくて十月劇場でやりたいのがたまたま仙台だった。だから、地元でやれたっていうだけです。そういうところなんですけど。あとは、そうだな、楽しかったですね。単純に。

—年間何本ぐらいやってたんですか、十月劇場。

松崎：年間ですね、そのアトリエ公演とかテント公演とか含めると、2回はやってたですね。多い時だと、たぶん、3、4本やってたんじゃないですかね。例えば新人公演みたいなやつとか、試演会とってワークショップとかって言ってたんです。簡単なテキストを4グループぐらいでやるとか、そういうのをやっていたし、ただ年がら年中芝居やってたような気がするんですよ。だいたい3ヶ月に一遍ぐらいは打ってたような気がする。

—ほぼ全公演出てるんですか？

松崎：僕ですか。僕は、全公演に関わったと言ったほうがいいかもしれない。もちろん、劇団で、あの当時スタッフって、そんなにね、今みたいに舞台監督だとか、細分化されていないし専門化されていない時代で、劇団で全部回さなきゃいけないとなると、みんな舞台監督もやり、照明もやり、音響もやり。その中では僕は照明やってたんで、役者外れれば照明。ですから、ほぼほぼの公演に携わっている。参加している。

—仕事をしながらだったんですか、その時は。

松崎：そうですね。ですから、定職っていうのは付いてないんですよ、みんな。定職付けないんですよ、その代わり。で、バブルの時もあって、ちょうど僕が若い時って、ある程度仕事を選ばなければ、バイトとかもあったんですよ。恐らく。僕の場合は照明のバイトだったので、そこはちょっと違うかもしれないんですけど。ですから、テント公演なんかで2ヶ月ぐらい回っても、その次の日からみんな仕事行ったりとかしてましたよね。

大河原：なんで演劇を続けているかっていうのを訊いてもいいですか。

松崎：なんでね。例えば、言っちゃっていい？ 例えばなんだけど、ほかにやれるものがないから照明やったんだよね。だって、バブルの頃さ、みんな就職して。気が付いたら俺、パソコンもやってないし、運転もなかったのよ。で、何できるって、照明しかとりあえず、今のところ食っていくもの。あとはバイトとかでね。レジ打ちとかはあったかもしれないけど。だから、照明以外にやるのがなくなっちゃったの。30 ぐらいの時に。役者も同じで、今さら役者を辞めたからって何すんのっていうだけで、役者をそのままやるっていうんじゃなくて、役者以外にあんた何できんのっていうところまで来ちゃった。でもよくよく言うと、30の時に 1 回決断したわけだ。役を 1 回外れるって。で、よく、ニュートンなんかも言ってたけど、30 を乗り切れればなんとみんな続けられるから、そこを踏ん張れとかっては言ってたんだけど。そこで 1 回俺、抜けちゃってるんだよね。照明で 1 回とりあえずは頑張ろうとかって。それがぽっとさ、かずえさん曰く、氷河期の恐竜がすぼってさ、雪溶けちゃってさ、恐竜のままぼっこって、仙台の演劇界に出てきたようなもんだから、僕ほうまくなる必要、全然ねえからなって言われて、復活した時に。俺もそのつもりねえから、今さらみんなに、若い人の技術とかに追いつこうなんて思ってねえし、昔のままぼっこって出すから、その違和感で楽しんでもらえばいいぐらい。

で、そのまま 12 年来て。で、今さらさ、続ける意味なんかないのよ。だから、辞める理由もないのよ。続ける理由もないんだけど、辞める理由もない。だってほかにできないんだもん。俺、運転はあんまり好きじゃないしさ、パソコン使えねえはでしょ。あと何ができるかって言ったら、自分の実家に近いお坊さんになるぐらいしかないんだもん。だから、なんでだろうな。あとは、せいぜい言えるのは、ニュートンとか、次郎さんが亡くなっちゃって、その年ぐらいまではやってみたいなっていうのまずあるけど。どういう風景だったんだろう。ニュートンの年は、あと 1 年、2 年であるけど。次郎さん 63 ぐらいまでだもん。そうすると、63 ぐらいまで行って、とりあえず 63 まで。で、どういう具合にあの人思ってたんだべなとは思。そうすると、そこ抜けるとき、なんか意外とまた違う目標があって、ああ、それが藤原さん 80 で芝居やって、80 で芝居やってるってどういう風景なんだろうっていうがさ。そのぐらいしかないかな。先の風景、見てみたい。